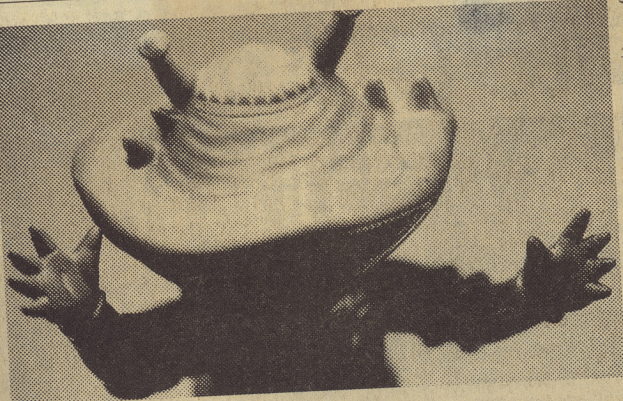


カネゴンのおもちゃ(撮影・小林健二)



## 高価より高雅 物より心

# おもちゃと茶の道

工場、そればかりかおもちゃの箱の印刷屋までもが下町に配置されていました。プリキ、セルロイド、ソフトビニール、プラモデル、プロマイド、メロンゴまであらゆる種類の立体物から紙製玩具までが、作られ、蔵前の問屋街で売られ、日本中へ送り出されてきました。

浅草人の「新し物好きで見栄っぱり」の気質が、おもちゃを発展させた要素と重なり

初期に作られた怪獣たち

浅草人の「新し物好きで見栄っぱり」の気質が、おもちゃを発展させた要素と重なり

「空想」という屋号を名乗る骨董玩具屋の僕の店には、一九六〇年代のおもちゃ黄金時代の空気と精神が、充満しています。店の棚を大きく占領しているのは、かつて一世を風靡したゴジラやガラモンなどの怪獣玩具です。

歴史的には江戸時代から、おもちゃは浅草とともに生きてきました。浅草寺の参拝時



いちろうやまぐち 山谷 一郎 神

のお土産品として、あるいは蔵前の旦那衆の手なぐさみとして、誕生したともいわれます。戦前戦後は輸出の花形として、隆盛をきわめました。おもちゃの職人、下請け

たよつです。この職人からメーカーまでの汗と涙と夢というバックグラウンドを見過しては、おもちゃは語れません。工業製品でありながら手作りの良さをかろうじて残していた一九六〇年代末期、浅草のマルサン商店から怪獣のソフトビニール人形が発売されました。悪役を商品化したこと、着色済みの皮質感を演出したことも画期的だったので

作られませんでした。手にした子供たちですら、一瞬ためらうほど、「似ていない」怪獣もありました。問屋すじに「グロテスク」と酷評されたこともありました。外側の綺麗より、子供に想像する余地を残す内側の相似を目標とした造形を、僕は「やんちゃ造形」と翻訳して

茶の世界でも昔からそうでした。大名物を持つている茶人が、一流扱いされています。どの時代でも、蔵書家は必ずしも愛書家ではないようです。茶の世界では、「数寄者」という免許皆伝者を育成し、健全な発展を意図してきました。茶聖利休はどう対処したのかと見れば、「一物持たず、胸ノ覚悟」との言葉を残しています。天心は「真の美はただ不完全な心の中に完成する人によって見いだされる」と結論づけています。

僕等は耳によってではなく、高価なものより高雅なもの

(作家、骨董玩具商)